

ロールシャッハ法における父親・母親イメージカード選択に表れる 対象関係についての検討

19007FRM 竹下 佳菜

I. 問題と目的

1. 対象関係の重要性

対人関係の問題は我々の心理的適応を考える上では重要な要素であり、幼少期の親子関係から発展し、成長するにつれて多様な対人関係場面に直面する。また、他者と関わる中では、個人がどのように対人関係を築いていくのかが問われるのである。このような個人の適応を考える上で対人関係の問題、あるいは、対人関係のありようについて、精神分析的な治療理論では、内的な対象関係という概念で扱ってきた。精神分析を創始した Freud, S. (1913, 1969) と母子の表象に着目した Klein, M. (1945) の2つの理論では、幼少期からの父親・母親との関係性を基盤としている。よって、個人の対象関係を考える上では、父親と母親に着目しながら考えていくことが重要である。

2. ロールシャッハ法について

ロールシャッハ法（以下、口法）は、全体としてのパーソナリティを理解する手段として用いられる。そこでは、H 反応や M 反応などがパーソナリティ理解を深めるための重要な指標となる。なぜなら、その人の対人的関心や感受性、想像力や共感性などを反映しているからである。さらに、口法には、付随している技法としてイメージカード選択（以下、IC 選択）がある。しかし、IC 選択実施は義務付けられていないため、検査者の判断に委ねられる場合や教示内容についてばらつきが生じることが明らかとなっている（石井, 2019）。IC 選択に関する先行研究では、父親イメージカード・母親イメージカード（以下、FIC・MIC）が解釈仮説通りに選択されやすいのか、またどのカードが選択されやすいかに関心が寄せられており、IC 選択そのものをより有意義に活用するための研究までなされていない

（福井ら, 2011・坪井ら, 2012）。

そこで、対象関係のあり方を明らかにするための手段として、IC 選択の中でも FIC・MIC に着目し、そこから表れる特徴の比較、そして、IC 選択の位置づけを再検討する。

II. 方法

A 大学に所属する大学生・大学院生 20 名を対象とし（男性 6 名、女性 14 名、平均年齢 22.3 歳）、口法、IC 選択、両親に関する聴取を施行した。

III. 結果

各事例の FIC・MIC で語られた選択理由を基に群分けを行い、その後の聴取内容（①対象者と両親の関係性、②両親との早期の思い出、③一番印象に残っている両親との思い出）とどのような繋がりがあるのかを検討した。

1. FIC・MIC 選択について

FIC・MIC をポジティブな父親群・母親群、ネガティブな父親群・母親群に分類をした。

FIC におけるポジティブな父親群では、その後の聴取で対象者との関係性においてポジティブな側面あるいはネガティブな側面が語られた。一方で、FIC におけるネガティブな父親群では、その後の聴取でネガティブな側面が語られた。MIC におけるポジティブな母親群では、FIC におけるポジティブな父親群と同様であった。また、MIC におけるネガティブな母親群では、その後の聴取でポジティブな側面が語られ、ネガティブな側面が語られた者は 1 名のみであった。よって、MIC でネガティブな母親群に分類されても、聴取ではネガティブな側面が顕著に表れず一貫性が見られなかったため、これが FIC との相違点となった。

2. H 反応と M 反応の視点からの検討

H 反応の視点からは、H% が著しく高い 6 事

例を取り上げ、IC 選択および両親との関係性を検討した。その結果、両親から厳しく怒られたエピソードや威厳的・支配的なエピソード、あるいは、母親にどのように思われているのかなど、父親あるいは母親との間で生じている葛藤が持ち越されている場合や、その葛藤が対人関係に影響を与えているということがわかった。

M 反応の視点からは、M 反応の産出数が通常範囲以上の事例と M 反応の質的検討、本研究独自で算出した M% が平均以下の 12 事例を取り上げ、IC 選択および両親との関係性を検討した。その結果、産出数の多さと両親との関係性を十分に検討することができなかった。M 反応の質からは、両親との関係性が反映され、M% の低い者は、両親どちらかに対してネガティブな側面を顕著に抱いていることがわかった。

IV. 考察

1. FIC・MIC と両親との関係性について

FIC・MIC と両親との関係性において、ネガティブな群の結果に相違点があったことについて考察をしていく。FIC については、FIC 段階で曖昧な理由や否定的な側面が語られていることから、意識的な内的父親イメージが抱けていないことや父子関係の心理的距離の遠さが考えられる。実際の父子関係では、情緒的な関わりが希薄的であったことから FIC 選択理由と一致している。一方で、MIC については、MIC 段階でネガティブな側面が語られても、実際の関係性は良好であった。これは、対象者の中に「よい対象」と「悪い対象」の両方が存在しているということが考えられる。このことについては、乳幼児期にまでさかのぼることとなるが、乳児は自分の創造能力に対応する外的現実があるという錯覚 (illusion) を持つことができるようになる。しかし、それは乳児の欲求に対して母親が適応してきたからであるが、徐々に母親の適応の完全さを減少させる「ほどよい母親 (Good enough mother)」の存在を知ることになり、内的世界と外的世界はいつも重なり合うわけではないという体験をするのである (脱錯覚)。このことについて祖父江 (2015) は、

親は常に自分のことを構ってくれたり、保護してくれたりするわけではない。親の都合もあって、知らん振りをされることもある。それでも、ウィニコット (1975 北山修訳 2005) が言うように、だいたい自分のことを守ったり世話してくれたりする「ほどよい母親」である、と現実の愛情について述べている。すなわち、ほとんどの対象者の中には「ほどよい母親」が存在していると同時に、よい対象関係が強化されているということがいえる。そのため、IC 選択理由あるいは母親に関する聴取の中でネガティブな側面が語られても、母親との思い出を振り返れば楽しい情緒体験が思い出され、陰性感情よりも陽性感情が勝るということである。

2. H 反応と M 反応について

H 反応は、対象者の対人関係における基本的なパターンや態度、あるいは、実際の両親との関係性が反応内容に象徴されていると考えられる。そして、M 反応については、産出数の多さから両親との関係性や対象者の能力を結びつけるのではなく、M 反応の質に着目することが必要であると考えられる。

3. IC 選択実施の意義について

FIC・MIC と両親との関係性において相反する内容が語られた者もいるということは、必ずしも内的な父親・母親イメージ理解に繋がるとは言えず、選択理由の説明や反応内容からの解釈では一面的な理解に留まる可能性が高いことが本論で示唆された。本論では、両親との関係性の聴取を実施したため、この情報が IC 選択の背景を知るきっかけとなり、一面的な理解に留まることを防ぐことができたといえる。これまで口法では、IC 選択とクライアント情報を切り離した見立てがなされてきたが、それらを併せて検討することでより対象者理解が深まると考えられる。本論であれば、両親に関する聴取内容を生育歴・家族歴の位置づけとして仮定し、それらの情報を IC 選択に繋げて解釈することによって、対象者理解を深めるための有力な道具となった。以上より、今後も IC 選択をより重視することに意義があると考えられる。